避難について知っておこう

避難の心得

いざというときのために、日頃から避難に必要なものを整理し、避難の手順について話し合っておきましょう。また、災害の危険性が想定された場合には、情報を入手して、早めの避難を心がけましょう。

状況により、すばやく避難しましょう
避難情報などが発表されていなくても、状況などから判断し、自主的に避難しましょう。

浸水時、自動車での避難は危険
普通自動車は約30㎝の浸水で走行困難になります。浸水時、自動車での避難は危険です。

浸水時に長靴は厳禁
避難には運動靴が最適です。長靴は水が入ると歩けなくなります。動きやすい服装で避難しましょう。

家族には連絡メモを残そう
外出中の家族には、「どこへ避難する」といったようなメモを残しておくと良いでしょう。

避難時はブレーカーを切りましょう
避難の際は、浸水による漏電や、電気火災の予防のためブレーカーを切ってから避難しましょう。

集団で助け合おう
単独での行動は避け、近所の人たちと集団で決められた場所へ避難しましょう。

持ち出し品は最小限に
非常持ち出し品はリュックサックにまとめ、両手が自由に使えるようにしましょう。

安全なルートで避難
避難場所への経路は、川べりや地下歩道などは避け、できるだけ安全な広い道を選びましょう。

避難行動（立退き避難・屋内安全確保と緊急安全確保）

水害や土砂災害の避難行動は、ためらわず災害リスクのない安全な場所へ早めに「**立退き避難（水平避難）**」することが基本です。また、浸水しない自宅の上階への避難や上層階にとどまる「**屋内安全確保（垂直避難等）**」により身の安全を確保することも有効です。立退き避難を行う必要があるにもかかわらず、適切なタイミングで避難することができなかった場合などは、少しでも浸水しにくい高い場所やがけから離れた場所に避難し、身の安全を可能な限り確保する「**緊急安全確保**」を行ってください。

計画的な避難行動

避難行動の基本です。

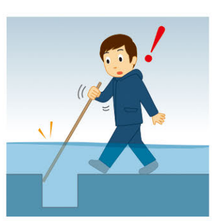
長時間の孤立に備え、水、食料などを備蓄しておきましょう。

緊急的な避難行動

逃げ遅れた場合の行動です。身の安全を確保できるとは限りません。

浸水後の避難　やむを得ず移動する場合は…

▶歩ける深さ
浸水時に歩ける深さは膝くらいまで。腰まで浸かって歩くと体力を消耗します。また、水深20㎝位でも、流れが速い場合は危険を伴うことがあるので注意が必要です。



▶足元に注意
浸水により足下が見えにくくなることで、道路と側溝や水路等の区別がつかなくなります。長い棒などで深い場所がないか安全を確認しながら歩きましょう。

大雨が降りそうなときは…

雨が強まってきたら、まずテレビやラジオ、インターネット等で発表される気象庁からの注意報・警報・特別警報や、市区町村などからの避難に関する情報に注意しましょう。不要不急の外出は控え、危険な場所には近づかないようにしましょう。

●床下・床上浸水の危険があります。家財道具や貴重品を高い場所に移動しておきましょう。
●地下には避難しないようにしましょう。

●豪雨で視界が悪くなると非常に危険です。あせらずに高台に移動しましょう。
●浸水でエンストしたときは、無理に再始動させるとエンジンを傷めてしまいます。

●急な増水や土砂災害の危険があるので、河川敷から堤防の外に移動しましょう。
●雨が降っていなくても、サイレンなどの警報が聞こえたら、すぐ退避しましょう。

土砂災害から身を守るためのポイント

● 危険度の確認〈住んでいる場所が「土砂災害（特別）警戒区域」かどうか確認〉

土砂災害発生のおそれのある場所は「土砂災害（特別）警戒区域」とされています。あらかじめ自分の家が土砂災害（特別）警戒区域にあるかどうか、ハザードマップや町のホームページなどで確認しましょう。

● 情報の入手〈雨が降り出したら土砂災害警戒情報に注意〉

雨が降り出したら、「土砂災害警戒情報」に注意してください。テレビやラジオの気象情報で発表されるほか、気象庁や、町のホームページで確認できます。**▶長雨や豪雨に注意**…急に強い雨が降ってきたときや、ずっと雨が降り続いているときには、土砂災害が発生するおそれがあるので警戒しましょう。

● 早めの避難〈危険を感じたら早めに避難〉

お年寄りや障がいのある人など避難に時間がかかる人は、移動時間を考えて早めに避難させることが大事です。
また、土砂災害の多くは木造住宅の1階で被災しています。どうしても避難場所への移動が困難なときは、次善の策として、近くの頑丈な建物の2階以上に緊急避難するか、それも難しい場合は家の中でより安全な場所（がけから離れた部屋や2階など）に避難しましょう。

危険を感じたら、ただちに避難！　局地的大雨（ゲリラ豪雨）

近年、急激に発達した積乱雲に伴う局地的な大雨（ゲリラ豪雨）による痛ましい事故が起こっています。このような事故は、雨による災害への警戒・注意を促す大雨警報・注意報に至らないような雨量でも起こることがありますので、川の中や川の近くにいるときは注意が必要です。
遊んでいる子どもや工事中の作業員は、周囲の状況の変化に気付きにくいため、保護者や監督者は危険を感じたら、すぐに避難を呼びかけましょう。総雨量は少なくても、十数分の短い時間で甚大な被害が発生することがあります。